

声に出して読みましょう。

赤とんぼ

新美南吉

赤とんぼは、三回ほど空をまわって、いつも休む一本の垣根の竹の上に、チョイととまりました。

山里の昼は静かです。

そして、初夏の山里は、真実に緑につつまれています。

赤とんぼは、クルリと眼玉を転じました。

赤とんぼの休んでいる竹には、朝顔のつるがまきついていていま。昨年の夏、この別荘の主人が植えていった朝顔の結んだ実が、また生えたんだろう——と赤とんぼは思いました。

今はこの家には誰もいないので、雨戸が淋しくしまっています。

赤とんぼは、ツイと竹の先からからだを離して、高い空に舞い上がりまし

| 読んだ日 | 時間 |
|------|----|
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |

三四人の人が、こっちへやって来ます。

赤とんぼは、さっきの竹にまたとまって、じっと近づいて来る人々を見ていました。

一番最初にかけて来たのは、赤いリボンの帽子をかぶったかあいおじょうちゃんでした。それから、おじょうちゃんのお母さん、荷物をドツサリ持った書生さん——と、こう三人です。

赤とんぼは、かあいおじょうちゃんの赤いリボンにとまってみたくなりました。

でも、おじょうちゃんが怒るところわいな——と、赤とんぼは頭をかたげました。

けど、とうとう、おじょうちゃんが前へ来たとき、赤とんぼは、おじょうちゃんの赤いリボンに飛びうつりました。

「あッ、おじょうさん、帽子に赤とんぼがとまりましたよ。」と、書生さんがさげびました。

| 読んだ日 | 時間 |
|------|----|
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |

赤とんぼは、今におじょうちゃんの手が、自分をつかまえに来
 やしないかと思って、すぐ飛ぶ用意をしました。

しかし、おじょうちゃんは、赤とんぼをつかまえようとせず、

「まア、あたしの帽子に！ うれしいわ！」と行って、うれしさに
 飛び上がりました。

つばくらが、風のようにかけて行きます。

かあいおじょうちゃんは、今まで空家だったその家に住みこ
 みました。もちろん、お母さんや書生さんもいっしょです。

赤とんぼは、今日も空をまわっています。

夕陽が、その羽をいっそう赤くしています。

「とんぼとんぼ

赤とんぼ

すすきの中は

あぶないよ」

| 読んだ日 | 時間 |
|------|----|
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |

あどけない声こえで、こんな歌うたをうたっているのが、聞こえて来きました。

赤あかとんぼは、あのおじょうちゃんだろうと思おって、そのまま、声こえのする方ほうへ飛とんで行いきました。

思おもった通とおり、うたってるのは、あのおじょうちゃんでした。

おじょうちゃんは、庭にわで行水きょうすいをしながら、一人ひとりうたってたのです。

赤あかとんぼが、頭あたまの上うへへ来ると、おじょうちゃんは、持もったおもちゃの金魚きんぎょをにぎったまま、

「あたしの赤あかとんぼ！」とさけんで、両手りょうてを高たかくさし上げました。

赤あかとんぼは、とても愉快ゆかいです。

書生しよせいさんが、シャボンを持もってやっ来て来きました。

「おじょうさん、背せなか中ちゆうを洗あらいましょうか？」

「いや——」

| 読んだ日 | 時間 |
|------|----|
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |

「だって——」

「いや！ いや！ お母さんでなくっちゃ——」

「困ったおじょうさん。」

書生さんは、頭をかきながら歩き出しましたが、朝顔の葉にとまって、ふたりの話をきいてる赤とんぼを見つけると、右手を大きくグルーッと一回まわしました。

妙な事をするな——と思って、赤とんぼはその指先を見えていました。

つづけて、グルグルと書生さんは右手をまわします。そして、だんだん、その円を小さくして赤とんぼに近づいて来ます。

赤とんぼは、大きな眼をギョロギョロ動かして、書生さんの指先をみつめています。

だんだん、円は小さく近く、そして早くまわって来ます。

赤とんぼは、眼まいをしてしまいました。

| 読んだ日 | 時間 |
|------|----|
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |

つぎの瞬間、赤とんぼは、書生さんの大きな指にはさまれていました。

「おじょうさん、赤とんぼをつかまえましたよ。あげましょうか？」

「ばか！ あたしの赤とんぼをつかまえたりなんかして——
山田のばか！」

おじょうちゃんは、口をとがらして、湯を書生さんにぶっかけました。

書生さんは、赤とんぼをはなして逃げて行きました。

赤とんぼは、ホツとして空へ飛び上がりました。良いおじょうちゃんだな、と思いつつ——

| 読んだ日 | 時間 |
|------|----|
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |

空は真青に晴れています。どこまでも澄んでいます。

赤とんぼは、窓に羽を休めて、書生さんのお話はなしに耳みみをかたむけています、かあいとおじょうちゃんと同じように。

「それからね、そのとんぼは、怒おこって大蜘蛛おおぐものやつにおこくいかかりました。くいつかれた大蜘蛛おおぐもは、痛いたい！ 痛いたい！ 助たすけてくれたってね、大おお声こゑにさけんだのですよ。すると、出でて来きたわ、出でて来きたわ、小ちいさな蜘蛛くもが、雲くものようくもに出でて来きました。けれども、とんぼは、もともと強つよいんですから、片端かたはしから蜘蛛くもにくもくいついて、とうとう一匹いっぴきの残ころらず殺ころしてしまいました。ホツとしてそのとんぼが、自分の姿じぶんを見ると、これはまあどうでしょう、蜘蛛くもの血ちが、まっかについてるじゃありませんか。さあ大たい変へんだって、とんぼは、泉いずみへ飛とんで行いって、からだを洗あらいました。が、赤あかい血ちはちつともとれません。で、神様かみさまにねがいしてみると、お前まえは、罪つみの無ない蜘蛛くもをたくさん殺ころしたから、そのたたりでそんなになつたんだと、叱しかられてしまいました。そのとんぼが今いまの赤あかとんぼなんですよ。だから、赤あかとんぼは良よくないとんぼです。」

書生さんのお話はなしは終おわりました。

| 読んだ日 | 時間 |
|------|----|
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |

わたし
私は、そんな酷い事をしたおぼえはないかと、赤とんぼが、
くび
首をひねって考えましたとき、おじょうちゃんが大声でさけび
ました。

うそ うそ やまだ はなし うそ
「嘘だ嘘だ！ 山田のお話は、みんな嘘だよ。あんなかあいら
あか
しい赤とんぼが、そんな酷い事をするなんて、蜘蛛の赤血だなん
て——みんな嘘だよ。」

あか ほんとう おも
赤とんぼは、真実にうれしく思いました。

れい しょせい かお い
例の書生さんは、顔をあかくして行ってしまいました。

まど はな あか かた
窓から離れて、赤とんぼは、おじょうちゃんの肩につかまりま
した。

あか
「まア！ あたしの赤とんぼ！ かあいい赤とんぼ！」

ひとみ くろ す
おじょうちゃんの瞳は、黒く澄んでいました。

あつ なつ ま
暑かった夏は、いつの間にかすぎさってしまいました。

あさがお かきね
朝顔は、垣根にまきついたまま、しお
れました。

すずむし すず こえ
鈴虫が、涼しい声でなくようになり
ました。

| 読んだ日 | 時間 |
|------|----|
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |

きょう あか 今日も、赤とんぼは、おじょうちゃんに会いにやって来ました。

あか 赤とんぼは、ちよつとびっくりしました。それは、いつも開いて
まど みな いる窓が、皆しまっているからです。

あか どうしたのかしら？ と、赤とんぼが考えたとき、玄関から
だれ と だ き 誰か跳び出して来ました。

おじょうちゃんです。あのかあいおじょうちゃんです。

きょう けれども、今日のおじょうちゃんは、かな かお 悲しい顔つきでした。そ
べっそう して、この別荘へはじめて来たときかぶってた、あか 赤いリボンの
ぼうし つ 帽子を着け、きれいな服を着ていました。

あか 赤とんぼはいつものように飛んで行って、おじょうちゃんの肩
かた にとまりました。

あか 「あたしの赤とんぼ……かあい赤とんぼ……あたし、東京へ
かえ わか 帰るのよ、もうお別れよ。」

おじょうちゃんは、ちい ほそ こえ な おじょうちゃんに言いました。

あか 赤とんぼは悲しくなりました。自分

おじょうちゃんといっしょに東京へ行きたいなと思いました。

| 読んだ日 | 時間 |
|------|----|
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |

そのとき、おじょうちゃんのお母さんと、赤とんぼにいたずらをした書生さんが、出てまいりました。

「ではまいりましょう。」

皆、歩き出しました。

赤とんぼは、やがておじょうちゃんの肩を離れて、垣根の竹の先にうつりました。

「あたしの赤とんぼよ、さようなら——」

かあいおじょうちゃんは、なんべんもふりかえっていいました。

けど、とうとう、皆の姿は見えなくなってしまったのです。

もう、これからは、この家は空家になるのかな——赤とんぼは、しずかに首をかたむけました。

淋しい秋の夕方など、赤とんぼは、尾花の穂先にとまって、あのかあいおじょうちゃんを思い出しています。

| 読んだ日 | 時間 |
|------|----|
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |
| / | 秒 |